

堀田 善衛

Yoshie Hotta

深沢 七郎

Shichiro Fukasawa

われらの文学

堀田善衛

Yoshie Hotta

深沢七郎

S Fukasawa

われらの文学 9

編集 大江健三郎 / 江藤淳

講談社

われらの文学 9

堀田善衛
深沢七郎

定価 四九〇円

昭和四二年五月一日 第一刷発行

昭和四二年九月一日 第三刷発行

著者 堀田善衛
深沢七郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽二―二―二一

電話 東京(九四二)一一一一 (大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

©講談社 昭和四二年 洛丁本・乱丁本にお取り替えいたしません。

目次

327	208	173	74	5	〈堀田善衛〉
甲州子守唄	笛吹川	檜山節考	鬼無鬼島	広場の孤独	

- 469 私の文学〓堀田善衛
- 473 私の文学〓深沢七郎
- 477 解説〈堀田善衛・深沢七郎〉〓日沼倫太郎
- 487 略年譜〈堀田善衛〉
- 488 略年譜〈深沢七郎〉

装幀〓細谷巖 卷頭写真撮影〓野上透

堀田 善衛

広場の孤独

一

電文は二分おきぐらいに長短いりまじってどしどし流れ込んで来た。

「え——と、(戦車五台を含む共産軍タスク・フォースは)と。土井君、タスク・フォースってのは何と訳すのだ？」

Commit [A] (罪・過) などを行う、犯す…… [B] 託する、委す、言質を与える、危くする、危殆に陥らしめる…… [C] 累を及ぼす…… That will commit us. それでは我々が危くなる……
(研究社・新英和大辞典・第十版より)

「前の戦争中はアメリカの海軍用語で、たしか機動部隊と訳したと思いますが……」

「そうか。それじゃ、戦車五台を含むタスク……いや敵機動部隊は、と」

副部長の原口と土井がそんな会話をかわしていた。木垣は『敵』と聞いてびくっとした。敵？ 敵とは何か、北鮮軍は日本の敵か？

「ちよっと、ちよっと。北鮮共産軍を敵と訳すことになっているんですか？ それとも原文にエネミイとなっているんですか？」

東亜部兼渉外部長の曾根田は、何かというと渉外関係を円滑にするため、という名目で外人記者その他を社用と称して待合へひっぱってゆくところから『お社用部長』という仇名で呼ばれていたが、戦争中サイゴンで仕入れたというしゃれた防暑服に派手な模様入りのストッキングをはいた足を机の上に投げ出したまま、ちらりと木垣、原口、土井の三人を横眼で見つ

「前後の関係をよく見極めて適当に訳しておいてくれ」と云ったかと思うと、すっと立って裏口から編集局を出て行ってしまった。ドアがばたんとしまったとき、吐き出すように

「あれだ、お社用め、何だかびくびくしてやがる。前後の関係をよく見極めて、か、ハイ、シャヨウですかだ

よ、莫迦莫迦しろ」

と云ったのは、平素口数の少い三十か三十一の御国の声であつただけに、木垣はふいとふりかえつて御国の顔を見詰めた。しかしその顔には別にこれといった表情もなく、既に先程から辞引片手にかかつていた、難解なマツクアーサー声明を訳しつづけていた。木垣は何となく、この御国という青年は黨員じゃないか、と直感的に考えた、しかし、この反動を以て鳴る新聞社の、それも渉外部に黨員がいてある筈は、ますないであらう……。

そう考へて木垣もまたさつきからかかつている夕刊用の長い香港電報の翻訳をつづけた。その電文の要旨は、如何に中共が香港、澳門などを通じて戦略物資の買付けに努力を集中し、かつは台湾からさえ石油製品が中共地区へ密輸されていることなどを報じて、朝鮮戦乱勃発とともに、次第に困難なものとなつて来た中共承認済みの英国の立場を、一層ぬきさしならぬものにしようとする、一種意地の悪い底意の感じられるものであつた。訳しながら、ふと彼は電文中の Commitment という言葉にぶつかつて鉛筆をおいた。夕刊第二版のメ切りまで後わずか十五分くらいしかなく、手を休める時間のある筈はなかつたのだが、それでも彼の眼と頭はその言葉に吸らつつけられてつた。Commitment——罪・過ナドヲ行ウ、為ス、犯ス、……ニ身ヲ任セル、危クスル、言質ヲトラ

レル、引キ渡ス——翻訳機械のようになつた頭は、この言葉にあてはまるべき訳語を次から次へと自動的にひき出していったが、その自動作用が漸時弱まってくる、彼は、いまこんな仕事をしていること自体、それは既に何かの Commitment をしてしまつたことになるのではないか、という、背筋に或る冷いものの流れるような反省が湧き起つて来た。それはいまにはじまつたことではなかつた。しかし、いま、北鮮共産軍をやみくもに『敵』と訳するかどうかという議論のあつた後だけに、コミットメントという一語は鋭く彼の虚点を衝くものを含んでいたので。しかし、とにかく、とにかく切迫している。彼はぐいと唾液を飲み込んで再び先を訳しはじめた。訳し終つて原稿をボーイにもたせてやり、椅子の背に身体をもたせかけると、背後で

「……Gotta goodie, Doi?」

というメリケンスラングが聞えた。

「None, none, everything's bad!」

何かいいニュースがあるか、なんにもありません、というわけであるが、話しかけた方は顔つきからして、如何にも幼い頃から味噌汁をすすり、畳の上をはいずりまわつて育つたに違いないどす黒い面相なのに、汚らしいアメリカのスラングを使い、黄と緑のアロハシャツをひらひらさせていた。話しかけられた土井は二十七、八歳

の二世だが、戦争中憲兵隊の通訳をしたため（これもまた一つのコミットメントだ……）米国へ帰れなくなつた、まだ少年とも云うべき渉外部員である。二人はつづけてあたりかまわぬ米語で女の話をはじめ、二人とも外国人風な身振りと言や肩の動かし方を真似て大袈裟に笑つた。二世の土井少年の方は、それでも不自然でなかつたが、皺だらけな日焼け顔のアロハシャツは、猫が片手をあげてふざける時のような甘たれた表情で、しきりに戦争中マニラで買った女が如何によかつたかという話を、云い廻しに困るとスラングで誤魔化しながらつづけていた。

夕刊第三版切り間際に、低い、下腹にひびくような、号外発行を知らせるブザーの音がして急に政治部のデスクに人がよつていった。共産党弾圧の政府発表があつたのだ。副部長の原口は、すぐに電話をとり上げ、人をはばかりような声でいまの弾圧をめぐる裏話や朝鮮の戦況の悪いことなどを誰かに報告し出した。恐らくは政界か財界のボスに情報を提供しているのであろう、と木垣は思った。原口は一応その電話を切ると、すぐにまた受話器をとつてある雑誌社にかけ、時局解説が出来てくるから取りに来い、と云い、受話器を置くや否や

「ボーイ、ます目の原稿用紙！」

と嗚鳴つてポールペンで荒々しくその時局解説なるも

のをなぐり書きに書き出した。原口は、身体の大きな西洋人だけに似合う筈の、根の形がそのままむき出しになつた巨大なパイプをくわえ、濃い煙を吐きつづげに吐いて猛烈な勢いでペンを動かし、三十分もたたぬうちに十数枚の原稿を書きとばした。木垣はその原稿が活字となり、何十万部か刷られて日本の隅々まで滲透してゆく光景を思い描いてみた。しかし、何も雑誌ばかりではない、木垣自身が朝からつづげさまに訳しつづけて来た新聞記事すらが、無署名なるが故になお一層動かし難い真実として人々の眼にうつるのではないか。後は再び、コミットメント、という言葉の思い浮べて

「やっぱりだ……」

とふと呟いた。

そこへ会議室から編集総務が電話で渉外部、東亜部全員と論説委員などの朝鮮戦争対策を議題に連合会議をやるから、デスクは一応木垣にあずけて、全員会議室へ来い、と云つて来た。

どやどやと十一、二人の人間が引きあげていったが、その間約三十分、不思議にさして重要な電文も電話送りの記事も来なかつた。木垣は机の上に足を投げ上げて考え込んだ。

「——やっぱりだ……」

しかし何がやっぱりだというのか。彼は二年前にS新

聞社をやめ、以来京子とともに翻訳の下請仕事をやりとりして細々と生計をたてていたのだが、それが、朝鮮に戦争が勃発すると、各新聞社ともに東亜部及び総司令部の戦況発表を扱う渉外部が急に多忙になり、人手不足になったところから、この新聞社に臨時手伝いとして呼び出されたのであった。

二年前、彼がS社をやめた時の、そのやめ方については彼自身かえりみてやましいところは殆どなかった。戦後に発足した新興紙のS社は忽ち経済的危機に見舞われ、出所のあやしげな資本を導入しなければやってゆけない状態にたちいたった。従業員組合は連夜十時頃まで大会を開いて新資本を呑むか否かを議論した。勿論勢いの赴くところは既に明らかであった。その最後の大会の、ぎりぎりの採決に入る直前、二十六、七歳の若い文化部の記者が立ち上った。

「緊急質問をいたします。それでは委員長は、われわれをあの呪うべき戦争に追いやり、しかも戦争で肥え太り、いままた虎視眈々と復活の道を狙っている追放資本をわが社に入れ、その資本の代弁者が重役として入って来て編集方針に容喙するとうい、そういう最悪の条件を認めよ、と云われるのですか？ 何も根拠はありませんが、その資本は、いま疑獄事件として法廷に持ち出されているS電工事件関係者から出たものという噂がありま

すが、どうなんですか、その点緊急質問としてお伺いしなく思います」

思えばあの頃から、この国の社会は底の方で揺れ出したのだ……。この質問に対して委員長が何と答えたか、木垣は既に忘れてしまっていた。恐らく忘れるしかないような、何の具体性もない返答であったのであろう。営業部や広告部、もちろん編集局内部さえも『いまさら追放資本だなんて。若い奴は困ったものだ。あいつ党员じゃないのか』そういう声があった。質問をした青年はもちろん共產党员ではなかった。木垣も一時は入党するのが自然だな、と思っていたのが、突然カトリック信者になって人を驚かせた青年であった。木垣は大会では殆ど何一つ発言せず、新資本が入り、S新聞が一般紙たることをやめて経済記事専門の新聞になったので、当時文化部系だった彼はすることもなくなった、としてやめたのであった。何も旋戦鮮明に追放資本導入に反対だったからではない。はつきり云えば、京子との同棲生活のため、家の問題、いや部屋の問題で困っていた際なので退職金が欲しいという、ただそれだけのことだったかもしれぬ。その時退職した人々は二十数名あったが、恐らくはつきりと追放資本の導入に反対する、としてやめたのはあの質問をした独身で親がかりのカトリック青年だけだったといっている。

人間は機械化された社会にあっては、生活の喜びを失う、という人がある。その通りかもしれない。しかし、次から次へとテレタイプが海外から送りつけてくる電文を翻訳し、白ゲンと呼ばれる紙切れに訳文を叩きつけてゆき、それが直ちに印刷される、その輪転機の、にぶく足許にひびいてくる唸りを身体に感ずることは、戦慄と云ったら云い過ぎるかもしれないが、そこに一種異様な肉体的な喜びめいたものがあることは否定できない。二年間の浪人生活中、四六時中世話になり放しの、S社時代の幹部だったT氏を通じて、いまのこの社から呼び出しがあったときにも、木垣は様々に考えた。しかし、輪転機の、あの唸るような呼び声は彼の心の奥の、或る脆い部分をゆさぶるかえし、日本が完全に独立するまでは、新聞にたずさわるとさえ、誓いみたいなのをどこかにひっこめようとさえ、彼は努力したのであった。そして……T氏の好意を無にしてはならぬ、たとえほんの一時だけでも出なければならぬ。と、都合の悪い部分はT氏のせいにして、いわば一種の事故ということにしてのこと出かけてゆき、惨烈な戦争の報道を煙草をふかしながら翻訳して、今日で十日目であった。そして彼は

「——やっぱりだ……」と。

受附から電話が来た。

「OA通信の外人の方がおいでですが、渉外部さんは会議中でしょうか？ どうしましょうか？」

呟きに木垣は

「お通ししろ」

と答えて自分ながら驚いた。臨時手伝いにすぎぬ彼は、責任のある問答の出来る立場にない。しかし日本人以外の人間、殊に戦争の当事者たる米国人がこの戦争を、ぎりぎりのところどううけとっているのか、本人の口から聞いてみたいという欲望はあまりにも強かった。彼はその記者を待つあいだ、隣の外信部のデスクに一つであった外国の新聞を一枚とった。表題には *Casette de Geneve* とあり、スイスの新聞であった。日本の新聞より一まわり大きい紙型に、のんびりと形のよい活字がならんでいた。日本の新聞は、如何にも活字が、まっ、ているという感じであるが、このスイスの新聞は、独仏二カ国語で表裏に同じ記事を扱っているようであった。たとえば《*Coree*》というフランス文字が大きく出ていても、それが、彼が毎時毎分扱って来た《*Korea*》とか《*朝鮮*》とかと同じ意味をもった言葉とは思えなかった。

——のんびりしてるように見えるな。

と、思って第一面をのぞき込むと、そこは文芸欄で、パリーの文壇消息のようなものを伝えていた。《サルトル

氏、再びモオリヤック氏と論戦」という見出しが眼についた。木垣はこの世界的に有名なサルトル氏の作品は何か一つ読んだことはなかったが、それでも興味を覚えて読み出し、途中で足を机から下し、緊張した姿勢にかえった。

それは文壇ゴシップというにはあまりにも露骨なものであった。サルトルがジャン・カスウ、アンドレ・ジイド、ヴェルコウル、アラゴン、ジャン・ゲーノなど、左翼乃至進歩的といわれる作家詩人たちとともに、フランス政府に中共を承認させ、中共の国連加入反対を停止せしめ、国際関係の緊張の緩和に貢献し、印度の平和維持のための努力を援助する目的で、平和と独立フランスのためのアピールを提唱したところ、カトリック作家のモオリヤックがこれに喰ってかかった、というのである。木垣はこういう云い分に喰ってかかるとは、一体モオリヤック氏にどういふ云い分があるのか、といささか不審に思った。モオリヤック氏の云うところは、今に及んでフランスの独立などとはとんでもない言葉遣いである。第一米国防省が独立という言葉をフランスの分派行動のあらわれと見たら、結局フランスはソヴィエト機械化師団に蹂躪されてしまふであらう。もし、サルトルやジイドに、いまなお自由人として生き自由人として死ぬに、自ら真実と信じることを考えかつ書く機会と自由

があり、自ら独立フランス人と称することが出来るならば、それはアメリカの武力を背景とする国際連合が、彼らの書齋を守っているからだ。仕事が出来るといふことが、そもそもアメリカのお蔭なのだ。中共の国連加入だの、フランスの独立だのと云ってアメリカの対仏不信を招くのは、怖るべき錯誤である……

木垣はこれと同じような議論を、スイスやフランスではなく、この日本の綜合雑誌でも何度か読んだことがあるような気がした。モオリヤック氏の言葉のうち、フランスというところを日本と置きかえれば、あれはそっくりそのままではなかったか……。木垣は時々自分でも、おれはナシヨナリストかしら、と疑うことがあったが、彼の心のうちには、国の独立と精神の独立とは不可分の関係にあるという、偏執概念のようなものがあった。

むき出しのセメントの床は、地下室にある五台の輪転機がフルに動き出したので、ディーゼル船のようなかすかな震動をはじめた。もし新聞に、世の難題が次々と解決され人々の不安を鎮めるような良いニュースばかりがのっているものなら、この震動をどんなにか心よく味わえることであらう。〈新聞よ、飛べ、平和の鳩のように〉とはいつかの新聞週間か何かの標語である、木垣はふとそれを思い出し汗をぬぐいながらも背筋に冷いものを感じた。

——寒々とするようなことばかりだ、この暑いのに。寒々とする、その頭の中で云ってみると、先程から commi. commitment と気にしていたことが、モオリヤック氏の云い分に接して一度にはっきりして来た。いま彼が手伝っている新聞の立場は、これを比喩として云えば、明らかにモオリヤック氏の側である。そしていわばサルトル、ジイドの立場に立った雑誌が、その立場の故に出なくなったという噂を二、三日前に聞いたことが思ひ出された。

——この新聞の手伝いをしていっているという事実は、個人的な考えの如何に拘らず、一切の他者に対して、明らかにこの自分自身がモオリヤック氏の立場に立つカテゴリーの中に入り、これを支持する、つまりそういう風に一步踏み出したことを意味する。

木垣はまた汗をふいた。そして先夜、戦後彼が上海で抑留されていた頃に知り合った、国民党系の中国人記者、張国寿と一緒に横浜へ行ったとき、所謂特需景気に酔いどれた労働者たちを見たことを思い出した。張国寿がそれを見て、見給え、やはり日本人は戦争を喜んでいゝ、と云ったことも思い出された。成程労働者たちは、懐ろが温そうで景気よく酔っていた。しかし、その顔には、張の云うような、あけはなしな喜びや満足の表情があるとはうけとれなかった。彼はまた

「あの爆弾なア、いくつ目だったか忘れたけれど、ひよとかついだら肩でつるりと滑りやがるんだよ、おれア、ほんとにひやつとしたぜ」

そんな会話を聞きつけた。その労働者の眼に木垣は、不安、不満、またしいて云えば或るうしろめたさのようなものも感じた。それは木垣自身の気持の反映にほかならなかったかもしれぬが、しかし爆弾をかつぐことによつて、彼らもまた内心の如何に拘らず一步限界を越えたのではないか。だが、限界とは何か。新聞社などに出ず、つまり社会組織の中へ現実に入らず、これまで二年間のように、家にもって探偵小説、通俗小説、冒険物語から大戦記録など、手あたり次第、金になり次第翻訳することが、限界を越さず手を清くしてすごすことか。そんなことはありえない。彼の家の近所に住む人で、共産党の新聞に籍があつたために追放されたKという人が、木垣のところへコーヒーやチーズ、バター、石鹸、衣料など、米国品や英国品の行商に来た。その人は来る度にこれは闇の品物ではない、正規の放出品である、と云った。弁解がましいところはちつともなかった。しかし、如何に安くて良質であろうとも、それを売られることはやはり民族産業にとつては辛いことではないか。号外を売り歩く鈴の音が聞える。共産党弾圧のニュースがひろまってゆく。しかしこれを全然弾圧と思わぬ人

もいる筈である。木垣は、自分がたとえ何を考えたにしても、その物思ひは型で鑄たように、定つてどこかで屈折して伸びなくなることを知り、気を紛らすために窓際へ立とうとした。

「Hallo, good day! Is everybody out?」

木垣の頭の上で、さかにも Good day とううにふさわしう、やささかもかげりのない明るい声が出た。十日前、彼がはじめてデスクについた日にやつて来て、既に顔見知りの外人記者が椅子の背に手をおいていた。OA通信のハワード・ハントであった。彼は部長の席を顎で示して、みな留守かとたずね、開襟シャツからつき出た逞しい腕で顔や首筋の汗をぬぐった。いま会議中だが、十分もすれば終るだろうから待たらどうか、と云うと、承知したという気持を全身で示して、ゆっくり

「All right.」

と答えて木垣の横の椅子をひきよせ、いままで彼が見ていたスイスの新聞をのぞきこんだ。そして「サルトル、サルトル、日本でまでサルトルは有名か」と肉づきのいい口許に皮肉味をたたえて呟きながら、いまさつき木垣が読んだサルトルとモオリヤックの論争記事を読み下し

「フランス人たちはあわてている」

と云った。

「いや、フランス人たちは考えているのだ」

と木垣が答えると

「考えているあいだにやられるかもしれぬ」

と応じて来た。木垣はこの返答に手応えを感じ、通り

一遍の挨拶を直ちに越えてみる気持になった。

「たとえやられるにしても、考えるだけは考えねばならぬ。この記事によると、モオリヤック氏は恐れているように思えるが、サルトル、ジイド氏は未来への道をひらくために考えているようにうけとれる。対立を深める一方の考え方、及び恐怖からは多幸な未来は生れえなう」

ハントは、ヘエ理窟っぽいね、というように肩をひよいと持ち上げて別のことを云い出した。

「僕はいまさつき朝鮮の前線から飛びかえったばかりだが、今度の戦争で日本人の考え方は随分な影響をうけたらうか?」

「アメリカ式の輿論調査によると、アメリカに頼らねばならぬという気持がぐっと深まったことになっている」

「何故だろうか?」

わかり切ったことだが、君個人の意見を聞きたいという風に、ハントは口許をゆるめていたが、数時間前まで朝鮮の修羅しよらを前にしていた眼は笑っていなかった。

「戦争の恐怖、征服され支配されることへの嫌悪!」

「しかし米国も君の国を征服し支配している！」

「その通り、しかしアンコールは御免だというのだ」

「けれども他国の征服や支配は、戦争の結果として、御免だろうが何だろうが、好むと好まぬとにかかわらず結果するものだ。アンコールが御免だと云うなら、何故米国に頼らないで自力で防衛しようと思わないのだろうか？」

「武装は憲法で禁じられているし、以後の戦争では一国だけでの抵抗というものは、米ソを除き、どの国にも不可能であろう。だからフランスは考えているのだ。日本も考えている。サルトル、ジイド氏らがモオリヤック氏に反撥するとすれば、それは恐らくモオリヤック氏の考えが恐怖に根差しているからであろう。恐怖は判断の基準についての確信を動揺させる。世界に共通の判断基準がなくなれば、あらゆる議論は反対側にとって、考慮の対象ではなく、挑戦とみなされるようになる、そうなれば理性はその役を果さず、歴史は人間の思考及び祈念をおしのけて自動的に破局へと廻転してゆく……」

単語をくりながら喋っているうちに、木垣は次第に動悸がしてくるのを感じていた。ハントにとってこんなことはただの会話であって議論でさえないかもしれぬ、それなのに何故おれの心臓は鼓動を早めるのか。このおれ自身が判断の基準についての確信を失っているからで

はないか、恐怖に憑かれて。

木垣が言葉を切ったので、ハントは彼が一息入れるつもりだと察して煙草をすすめた。木垣はハントに影響されないで自分の意見をまとめようとし、彼の煙草を断つて自分の煙草をとり出した。火をつけて一服、二服ふかしたところで

「そうなれば……」

とハントは毛むくじらかな手で再び汗をぬぐい、木垣に後をうながした。木垣は何となく訊問されているような気持がすると同時に、この機会に自分の考えをはっきりさせてみようと思った。

木垣が黙って考え込んでしまうと、ハントもしばらく、朝鮮で流された血を見続けに来て来たに違いない鋭い眼差しを伏せ、胸の中の何かを抑えるように大きな手を膝に置いた。そしてぼつりと

「朝鮮の情況は深刻だ。しかし米軍は決して海へ放り出されるようなことはない。米国人が血を流して持ちこたえている間に、キガキ、君もゆっくり考えてくれ、僕も考えよう」

と白人に特有、と云っていい卒直で素直な口調で云い、部長の曾根田に先に会うつもりだったが、会議は大分長い、「みな考えている」ようだから、先に編集局長に会う、と云って木垣に手をさし出した。

二、三歩あるいたかと思つと、ハントはまた戻つて来て

「明日、僕は三十四歳の誕生日を迎える。夕方六時に外人記者クラブへ来ないか、他の記者連中とも話そう」

と云つた。

ひとしきり跡絶えていた電報がまた続々流れ込み出した。隣の外信部のデスク近くに置いてあるテレタイプが鳴り出し、ワシントンから、ロンドンから、パリから、モスコオから、キャンベラやブエノス・アイレスから、またニューデリー放送はヒマラヤ山脈の向う側新疆省でさえも人間の社会生活の目的に対する共感が停止し、かつて知らぬ動揺が起つてゐることを伝えて来た。

木垣一人ではさばききれなくなり、会議室へ電話して応援を依頼した。

御国が走つて来た。デスクにつくとすぐに御国は机一杯になつた戦況関係の電文を見ようとせすに

「あなたの云つたことが大分問題になつたよ」

と云つた。咄嗟に木垣には何のことか見当がつかず、なおも鉛筆を走らせながら

「ええ？」

と聞きかえしたが、急げば急ぐほど字が大きくなるな、などつつまらぬことを考えていた際だったので、大して気にもしなかつた。

「あなた、北鮮共産軍を『敵』というのはどういうことだ、と云つたでしよう？ それですよ」

「なんだって。そんなことがどうして」

「思想が悪い、つてんでしよう。特に副部長の原口がね」

木垣は、先程政界か財界のボスらしい人のところへ電話をかけ、最悪の場合はずな、つまり増援軍の到着がおくれたりするとすな、海へ押し出されることもないではないという情勢ですな、それでです、そうなれば再軍備、いやその……警察隊の増強は必至ですから、先ず織維製品や皮革、木材などはすな……などと云つていた原口の厚ぼったく異常に赤い唇を思い出した。

「へえ、そういうことになりますかな、思想が悪い、とね」

「へえ、だなんて。そうなんですよ。僕自身が第一、あなたに忙しいからつて援軍を呼ばなくても、お前はこの会議から席をはずせ、と云わんばかりな扱いだつたんですから」

「君が……それはまたどうしたわけかね？」

ふいに木垣は先程の（黨員じゃないか）という疑問がまた湧き上つて来たので鉛筆を置いて聞きかえした。

そこへ上半身裸で、見事な体軀の地方部長がどたどたと走つて来た。手に原稿を一枚もつてゐる。